

如意輪まいり

亀崎を歩く

亀崎区（豊栄地区）で毎年2月に行われる「如意輪まいり」は、今年は19日に予定されているそうです。

同区のコミュニティセンターから男性たちの囃子の音頭に合わせ、着飾った女性たちが万灯を先頭に近くの稻生神社境内にまつられる子安社まで踊り歩きます。

子安社の前には、子安観音などが描かれた3幅の掛け軸がつるされお供え物があげられています。境内では、囃子の音によって女性たちが本殿の周りを踊った後、子安社に向かい踊りを奉納します。



2月に行われる「如意輪まいり」。子安社がまつられる神社境内で、万灯を先頭に着飾った女性たちが踊る

筆者がこの行事を初めて取材したのは40数年前で、会所ができる以前は毎年順番で各家を「ヤド」として行われたといい、大正時代の経費を書いた記録を見ました。当時この行事の呼び方はなく、紹介の際に「如意輪まいり」としました。

つい最近まで2月19日に行われ、江戸時代から続く「十九夜講」との関連が考えられます。その講は女性の集まりで、毎月19日の夜に集まり如意輪観音に安産を祈願したものです。

亀崎区の会所がある寺の境

内に1755（宝暦5）年に建てられた「十九夜塔」には、如意輪観音像が刻まれ、亀崎村十九夜講中「善男善女」とあることから村を挙げてまつったのでしよう。この塔は市内での造立年が最も古いものになりますが、この頃から行事が行われていたとするには少し無理があるようです。

「亀崎村善女人中」による如意輪観音像塔の造立は、1822（文政5）年、1854（嘉永7）年にも見られます。この2基の塔は、所在する場所から考えて「流れ灌頂」のために建てられたのでしよう。流れ灌頂とは、出産で亡くなった女性などを供養する行事で、塔は川のそばに建てられました。如意輪まいりもこの頃から始められたと考えることもできそうです。

明治初年に神仏分離がありました。先頭に僧侶が子安社に納める幣束を持ち、月遅れの縁日に行事を続けたなど、時代が変化する中で固く続けられてきたことを強く感じられる如意輪まいりです。

（市文化財審議会委員・

依知川雅二）

閩秘書課広報広聴班

☎73・0080